

# 「白痴」の位置

——戦後安吾文学の出発——

花 田 俊 典

## 一

昭和二十年九月八日、坂口安吾は新潟に住む長兄の献吉に宛てて長文の手紙を書きおくっているが、そこで安吾は、やがて「今年の暮あたりから相対深刻な国内状況になるものと予想しなければなりません。相当暴動化する恐れもあるでしょう」との見とおしを述べて、さらに次のような忠言をなしている。

さて、ここで、最大の眼目を率直に申上げますと、混乱、動乱を怖れてはならぬ、ということですが、もし、混乱、動乱を回避することを之事となし、できるだけ表面の波瀾をさけて一時のまとまりを主眼とするなら、我々は全く大いなる犠牲を払って負けたことが意味をなさぬ。よって我々はこの敗戦を最大の教訓と

して真に新に、真に光輝ある出発をなすために、当然起るべき混乱は回避せず、当然あるべき波瀾を率直に迎えて、之を誤魔化することなく、真実の力を以て一つずつ乗り越えて建設しなければならぬ、ということですが。之が今後に処すべき我々の覚悟の眼目でなければなりません。そして特に、新聞の指導原理の眼目でなければならぬと思います。この覚悟が定まっておらなければ、敗戦処理の第一線に立つ資格はないでしょう。

ここに「新聞の指導原理の眼目」云々とあるのは当時の献吉が新潟日報社取締役社長の職についていたためだが、安吾はこのあと、「東京の新聞はまだこの覚悟が出来ておらぬ。特に朝日新聞の如きは忽ち『事忽れ主義』的態度をとりはじめています」と不満を洩らしている。

戦後の社会はしかしながら、こうした安吾の「予想」と

「覚悟」とを充分なかたちで体现しえたとは言いがたい。

「当然起るべき混乱」や「当然あるべき波瀾」は一見おとずれるかに見えたが、そのじつ時代は逆に安吾の危惧した「『事忽れ主義』的態度」のもとに不十分なる再建への道を踏みだしていた。そして周知のごとく、ついには「その悲惨や憤怒のうちに含まれていた貴重な認識の鉅脈も掘りつくし究めつくされぬままに見すてられ、廃坑のように形骸化した」(高橋和巳)<sup>註1</sup>へ戦後Vを結果として残してしまふこととなる。

そういった時代の流れに不満をおぼえた安吾は、いちはやく「墮落論」(「新潮」昭21・4)を発表して、「生きよ墮ちよ、その正当な手順の外に、真に人間を救い得る便利な近道が有りうるだろうか」、「墮ちる道を墮ちきることによって、自分自身を発見し、救わなければならない」とよびかけた。さきの献吉宛書簡から半年余り、「真に光輝ある出発」を希求する戦後の安吾の実質的な第一声であったといつてよい。

ついで安吾は「白痴」(「新潮」昭21・6)を発表した。

「その家には人間と豚と犬と鶏と家鴨が住んでいたが、まったく、住む建物も各々の食物も殆ど変っていやしい」という有名な書きだしにはじまるこの作品は、一般に、「『墮落論』とそのまま相通ずる仕組みの小説」(小田切秀雄)<sup>註2</sup>とか、「『墮落論』と表裏をなす小説」(兵藤正之助)<sup>註3</sup>と

目されている。

なるほどそのとおりには違いなからうが、しかし「白痴」一篇のなかから、「墮落論」のあの「生きよ墮ちよ」という声高な太い旋律がそのまま響いてくるだろうか。やはり評論と小説との差だという理由ではかたづけることのできないずれがそこには見られるのであり、その意味で興味深いのは本多秋五の次のような意見である<sup>註4</sup>。

とにかく、ある作家の随筆や批評文は、その作家のつくり物語をとくカギとして役立つのが普通だが、『墮落論』の場合にかぎっては、その反対に、『白痴』その他の小説をカギとして読むのでなければ、その真意はつかみがたいと思う。

この本多の言は「墮落論」についてのものだが、同時に「白痴」の位置をも端的に示しているといえる。本多は、「墮落論」を一瞥したかぎりでは理解しがたい安吾の「真意」、すなわち「生きよ墮ちよ」という結語の背後にある複雑で微妙な心理が、「白痴」のなかによく語られていると指摘する。つまり、「白痴」は「墮落論」の「生きよ墮ちよ」との主調音とではなくして、もっと別の何ものかにより緊密に連絡しているというのである。

とすれば、「白痴」をただ単に「墮落論」の小説化とだけ言ってしまうことはできないわけで、そこには若干のただし書きが必要だということにもなつてこようが、いずれ

にせよ「白痴」をいったん「墮落論」の呪縛から解き放ったうえで、あらたに作品を見てゆく作業の試みがなされてしかるべきだと思われる。

## 二

今月の中央公論へ書いたのは、今年の二月に書いたもので、荷風と二つ並んでどっちも情痴文学ではこまる、というので、発表がおくれたものです。「白痴」より、二月ぐらい早く書いたものです。自ジョ伝の如くですが決して自ジョ伝の一部ではありません。小説です。虚構なのです。

これは安吾の昭21・7・24尾崎士郎宛書簡の一節だが、この「今月の中央公論へ書いた」作品とは「外套と青空」(「中央公論」昭21・7)のこと、また「荷風と二つ並んで」云々とは同誌一月号(再建第一号)から六月号まで荷風の小説「浮沈」<sup>うきしづみ</sup>が連載されていたという事情をさしている。ここから、安吾は「墮落論」と前後して二月頃に「外套と青空」を書き、それから「二月ぐらい」たって「白痴」を書いたことが知れる。

ところで、安吾が旧知の尾崎士郎にむかって、わざわざ「外套と青空」は「自ジョ伝の如くですが決して自ジョ伝の一部ではありません」などと弁明しているのは見落とせ

ない。おそらく、安吾が気にしているのは、ヒロイン・キミ子をごとか思わせる女性との関係が戦争中にあったからであろう。たとえば大井広介は「戦時中の坂口」(「文学界」昭30・4)のなかで、安吾から当時「ひんぴんと」貰った「便り」(戦災で焼失)の内容の紹介として、次のようなエピソードを伝えている。

なかには、坂口があるパイ一屋の女と恋仲になった。せまい店で、女とコック兼主人の二人きり、坂口はさうとはしらず、あけすけに口説いてゐたら、女は主人の女房であつたといふ便り。その後篇は深刻で、思ひあまつてとびだした女と、安宿を転々してゐるうち、坂口のお臍の中にエロダニといふのが喰ひついとれない。どうしたものか。私は何時か宮内寒弥がエロダニの妙薬を知つてゐると話してゐた。私からも問ひ合せると、返事した。かうかくと滑稽な手紙のやうだが、哀調切々、心中でもしやしないかと心配した。ここで大井の語る「あるパイ一屋の女」がはたして誰なのか、いまその詳しいところはわからない。ただ、平野謙の「平野探偵の手記」(『はじめとおわり』講談社、昭45・2)<sup>註5</sup>には「空襲がはげしくな」った頃に「坂口安吾が女の子と防空壕で寝たりして」いたとの証言があり、また安吾の自伝小説「魔の退屈」(「太平」昭21・10)のなかにも、それらしき女性が登場してくる。

女は晴着のモンペをつけてアイビキにでかけてくるくせに、魂には心棒がなく、希望がなく、ただその一瞬の快楽以外に何も考えていないだらしなさだった。何のハリアイも持っていなかった。そしてただ快楽のままに崩れて行く肉体だけがあった。

いかにも安吾らしい女V観であり、例の「いずこへ」(「新小説」昭21・10)の女、すなわちバー「ボヘミアン」のマダム「お安」にも通じるところがあるが、「外套と青空」のキミ子は、まさしくこのような肉慾の権化としての女Vのイメージをそのまま受けついでいるのである。もっとも、キミ子は一見したかぎり、ただ平凡な普通の女ではない。

十人並よりは美人であるが、特に目を惹く美しさではない。芸者あがりの立居振舞、身だしなみは流石に筋が通っているが、教養は粗雑で、がさつの性であり、舟木の所謂「化粧された精神」などは凡そあべこべの低い女だ。二十七の小柄な敏捷な身体に肉慾をそそる情感は豊かであったが、概していえば平凡の一語につきるあたりまえの女である。

ところが、やがてキミ子はその肉体をもってして、「尾羽打枯らした三文文士」の落合太平をとりこにしてしまう。太平は「肉慾以外のあらゆるキミ子を否定し軽蔑しきつてい」て、「ひとときの純情も、ひとときの人格も認め

て」いないのだが、どうしても彼女の肉体の「魔力」には打ち克てない。

太平はキミ子を抱きよせた。ふわりと寄る一きれの布片のような軽さばかりを意識した。キミ子は待ちうけていたようだった。優しさと限らない情熱のみの別な女のようなだった。キミ子は強烈な力で太平を抱きしめ、黒い土肌に惜しげもなく寝て、青空の光をいっぱい浴びて目をとじた。

いつしか太平はキミ子の亭主の生方庄吉から彼女を貰い受けたという「氣違いじみた決意」を抱くようになったりするが、気ままなキミ子は忽然とどこかへ立ち去ってしまう。

ひと月あまりたって、太平が庄吉を訪ねると、庄吉は「綿をつめて作った布の人形」をとりだしてきて、みんなキミ子の作品だが好きなものを取りたまえ、と言う。「どの人形も理智よりも肉体の情慾ばかりで」、しかも「絡みつくようなしつこさと、狙っている肉慾の目があった」。

けれども太平は人形を貰わずに戻ってきた。いとまを告げるまでは矢張り貰って帰ろうかと思いついていたのであるが、外へでるとその迷いは消えていた。低俗な魂への憎しみが高まっていた。暗闇を這いずるような低い情痴と心の高まる何物もない女への否定が溢れ、その暗闇を逃れでた爽かさが大氣にみちて感じら

れた。あの人形もずいぶん奇妙な肉感に溢れていたが、そして、どこかしらキミ子に似ていたが、と、太平はゆとりの籠った追想に耽った。だが、冬の夜明けの外套と青空の下の情熱はさすがに見当らない。あの外套とあの青空がなければ——そしてその外套もその青空もすでに戻らぬことに思い至ると鋭い痛苦が全身を砕き、太平はただ千丈の嘆息のみを知るのであった。

こうして「外套と青空」一篇の幕は閉じられている。この最後の場面で、太平は「暗闇を這いずるような低い情痴と心の高まる何物もない女」としてのキミ子を「否定」し、そう思い決することによって「その暗闇を逃れでた爽かさ」を感じる。しかし一方、生への限りない「情熱」という点からすれば、「鋭い痛苦」と「千丈の嘆息」とをおぼえざるをえない。つまり、太平はここで、安吾自身の言を借りるなら「肉体と精神との結婚、その宿命を負う人間の懊惱<sup>註6</sup>」を深くかかえこんでいるのである。

### 三

いま見た「外套と青空」のなかでどこかへ立ち去ってしまったキミ子が、もしくはその形見の「ずいぶん奇妙な肉感に溢れてい」る人形が、やがて「白痴」一篇において

「おサヨさん」とよばれる白痴の女として甦った、ととらえることはできないだろうか。

たとえば「白痴」のなかに次の一節がある。

この白痴の女は米を炊くことも味噌汁をつくることも知らない。(中略)二百円の悪霊すらも、この魂には宿ることができないのだ。この女はまるで俺のために造られた悲しい人形のようなではないか。伊沢はこの女と抱き合い、暗い曠野を飄々と風に吹かれて歩いている、無限の旅路を目に描いた。

ここで白痴の女は伊沢によって、「この女はまるで俺のために造られた悲しい人形のようなではないか」と評されている。この「悲しい人形」という譬喩を安吾がどのくらい意識に使ったのかは不明だが、ひとつの結果として見るかぎり、キミ子と白痴の女とは人形をあいだに挟んで見ごとにつながるっているといつてよい。

というのは、「外套と青空」にはすでに、「飛びついてきたキミ子は白痴のようだった」という一文が見えている。また、「白痴」において「一人の新たな可愛い女が生れでた新鮮さに伊沢は目をみひらいて水を浴びる女の姿勢をむさぼり見た」といったぐあいに使われる「可愛い女」ということばが、キミ子に対してもやはり同様に与えられている。<sup>註7</sup>つまり、キミ子が白痴の女へと変身してゆく必然性の一端が、こういったところにもうかがえるからにはか

ならない。

そして何より、白痴の女は肉慾の権化としての「女V」の属性をキミ子から最も大きく受けついでいる。

その日から白痴の女はただ待ちもっている肉体であるにすぎずその外の何の生活も、ただひとときの考えすらもないのであった。常にただ待ちもっている。伊沢の手が女の肉体の一部にふれるというだけで、女の意識する全部のことは肉体の行為であり、そして身体も、そして顔も、ただ待ちもっているのみであった。驚くべきことに、深夜、伊沢の手が女にふれるというだけで、眠り痴れた肉体が同一の反応を起し、肉体のみは常に生き、ただ待ちもっているのである。眠りながらも！

このように「ただ待ちもっている肉体」を持たされた白痴の女もまた、「人間」であると同時に「人間以外のもの」でもある不可思議な存在として、インテリ伊沢を混乱におとし入れ懊悩させる重要な役割をはたすのであって、その点でもキミ子の場合と一致する。

さらに、もっと視野をひろくとれば、「外套と青空」と「白痴」とのあいだには、このキミ子から白痴の女へという関係だけですることのできない多くの結びつきがある。ともに舞台が場末にとられているとか、太平と伊沢とがきわめて類似した人物であるといったことなども、そこ

には挙げられよう。「肉体と精神との結婚、その宿命を負う人間の懊悩」という「外套と青空」のモチーフは、むしろそのまま「白痴」のものでもある。そのほか数えあげればきりがなが、いまここで見落せないと思うのは「外套と青空」の、たとえば次のような箇所である。

「死にましようよ」

太平は当惑した。愛情は常に死ぬためではなく生きるために努力されねばならないこと、死を純粹と見るのは間違いで、生きぬくことの複雑さ不純さ自体が純粹ですらあることを静かな言葉で説明したいと思ったが、キミ子の心はささやかれている言葉以外の何事をも見失った一途なもので、少くとも感情の水位が太平よりも高かったから、太平は低い水位から水を吹き上げることに無力さを感じることと苦しんだ。

そして、これはどこかしら「白痴」の次のくだりを思わせはしないだろうか。伊沢が「女を寝床へねせて、その枕元に坐り、自分の子供、三ツか四ツの小さな娘をねむらせるように額の髪の毛をなでてやる」場面である。

私はあなたを嫌っているのではない、人間の愛情の表現は決して肉体だけのものではなく、人間の最後の住みかはふるさとで、あなたはいわば常にそのふるさとの住人のようなものだから、などと伊沢も始めは妙にしかつめらしくそんなことも言いかけてみたが、

もとよりそれが通じるわけではないのだし、いったい言葉が何物であろうか、何ほどの値打があるのだろうか、人間の愛情すらもそれだけが真実のものだという何のあかしもあり得ない、生の情熱を託すに足る真実なものが果してどこに有り得るのか、すべては虚妄の影だけだ。女の髪の毛をなでていると、慟哭したい思いがこみあげ、さだまる影すらもないこの捉えがたい小さな愛情が自分の一生の宿命であるような、その宿命の髪の毛を無心になでているような切ない思いになるのであった。

いちがいに同じだとはいえないが、いずれも「言葉」の世界に生きる一種のインテリが、というより安吾の認識にそくして言えば「人間」が、「人間以外のもの」によってそのたよりない生の基盤をゆるがされている図として共通したところがあるだろう。伊沢のほうがよりつきつめたかたちで思い知らされてはいるにしても、しょせん太平とのあいだに決定的な差があるというわけのものでもない。

したがって、こういったぐあいに見てゆけば、けっきょく「外套と青空」は「白痴」の原型をなす作品と見なすことができる。言いかえるなら、「白痴」は「外套と青空」を前作として成立した作品にはかならないのである。

#### 四

ただし、「白痴」は「外套と青空」とただちにつながる作品ではない。「外套と青空」から「白痴」へと向かうあいだに、安吾のなかで、いわば戦争体験の意味を問いただそうとする作業の試みがひとまずの決着をみた。その事実が「白痴」成立の背景に大きく横たわっているといわざるをえない。

しからば、いったい安吾なりの戦争体験に対する結論とは何であったのか。「墮落論」は「外套と青空」と同じ時期に書かれたものでありながら、すでにその内容をよく語ってくれている。

ところで「墮落論」の「生きよ墮ちよ」という結語の発想はひろく知られるとおり、「文学のふるさと」（『現代文学』昭16・8）から「日本文化私観」（『現代文学』昭17・3）あたりで確立された彼固有のものであった。「文学のふるさと」を例にとってみれば、そこで安吾は「生存それ自体が孕んでいる絶対の孤独」を顕現してくれる「三つの物語」を紹介して次のように言っている。

モラルがないこと、突き放すこと、私はこれを文学の否定的な態度だとは思いません。むしろ、文学の建設的なもの、モラルとか社会性というようなものは、

この「ふるさと」の上に立たなければならぬものだ  
と  
思うものです。

これが、たとえ世間一般の通念からすれば「墮落」という  
かたちをとるにせよ、既成の道徳や制度から自在になって  
「自分自身を発見し、救わなければならない」という「墮  
落論」の主張と発想を同じくしていることは自明である  
う。安吾の生き方を支える根本的な認識として、いまさら  
贅言するまでもないところであり、彼自らのちに自身の  
「生き方を確立した<sup>註</sup>」と語る「日本文化私観」の「すべて  
は、実質の問題だ」という発言もまた、ここから生みださ  
れたものにほかならない。

しかし、このような安吾ではあっても、戦時下の自身を  
ふりかえって反省するところがあつたようである。

私は戦きながら、然し、惚れ惚れとその美しさに見  
とれていたのだ。私は考える必要がなかった。そこに  
は美しいものがあるばかりで、人間がなかったから  
だ。(中略) 戦争中の日本は嘘のような理想郷で、た  
だ虚しい美しさが咲きあふれていた。それは人間の真  
実の美しさではない。そしてもし我々が考えることを  
忘れるなら、これほど気楽なそして壮観な見世物はな  
いだろう。たとえ爆弾の絶えざる恐怖があるにして  
も、考えることがない限り、人は常に気楽であり、た  
だ惚れ惚れと見とれておれば良かったのだ。私は一人

の馬鹿であつた。最も無邪気に戦争と遊び戯れてい  
た。

ことわるまでもなく「墮落論」の一節だが、これと同じよ  
うなことは、たとえば「魔の退屈」においても、「つまり  
我々は虚しく食って生きている平和な阿呆であつたが、人  
間ではなかつたのであり、「もとより私自身が完全にそ  
の阿呆の一人であつた」と書かれている。

この「考えることを忘れ」た「一人の馬鹿で」しかなか  
つた戦時下の人間の姿の発見と、そのような過去への反省  
の思いが、じつは安吾をして「外套と青空」から「白痴」  
へと向かわしめた最大の要因だといって過言ではないだろ  
う。「外套と青空」のキミ子は「ただ肉慾の餓鬼であ」り  
ながら、人間として本来あるべき理知的な側面をまだしも  
残していた。それが「白痴」に至ると完全に理知のひとか  
けらもない「豚そのもの」の白痴の女になっている。とと  
もに伊沢のほうもまた、大学を卒業して新聞記者から文化  
映画の演出家の見習いになったという、きわめて理屈っぱ  
い男として登場している。いずれも「肉体と精神」の問題  
をつきつめたかたちで追求しようとする安吾の意図の反映  
したものにはかならないが、こうした「外套と青空」と  
「白痴」とのけっして短くはない距離を思えば、そこに  
「墮落論」が介在していることは否めない。安吾が「墮落  
論」を書くことによって戦争中をじっくりとふりかえり、



この年来のテーマにいつそう切実な感をおぼえたであろうことは想像に難くないのである。

ゆえに「白痴」における伊沢の白痴の女との闘いは、かなり熾烈なものとなっている。

ああ人間には理智がある。如何なる時にも尚いくらかの抑制や抵抗は影をとどめているものだ。その影ほどの理智も抑制も抵抗もないということが、これほどあさましいものだとは！ 女の顔と全身にただ死の窓へひらかれた恐怖と苦悶が凝りついていていた。苦悶は動き苦悶はもがき、そして苦悶が一滴の涙を落している。もし犬の眼が涙を流すなら犬が笑うと同様に醜怪きわまるものであらう。影すらも理智のない涙とは、これほども醜悪なものだとは！

いわゆる近代人たる伊沢も最初のうちは「俺にもこの白痴のような心、幼い、そして素直な心が何より必要だったのだ」などと分別らしく思っていたが、さて押入のなかで空襲におびえる白痴の女の「虚空をつかむその絶望の苦悶」の相を目のあたりにしては、このように激しく嫌悪せざるをえない。はては「俺は女を殺しはしない」が「戦争がたぶん女を殺すだろう」とひそかに「せせら笑」って「空襲をきわめて冷静に待ち構えてい」るまでに嫌悪の思いはつよくなってしまうのである。

ところが空襲のさなか、伊沢は白痴の女が「人間」であ

ることをかいま見て狂喜する。

「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をただまっすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね」女はごくんと頷いた。

その頷きは稚拙であったが、伊沢は感動のために狂いそうになるのであった。ああ、長い長い幾たびかの恐怖の時間、夜昼の爆撃の下に於て、女が表わした始めての意志であり、ただ一度の答えであった。そのいじらしさに伊沢は逆上しそうであった。今こそ人間を抱きしめており、その抱きしめている人間に、無限の誇りをもつのであった。

しかしながら、やがて伊沢はこれが幻想であつたらしいことを思い知らされて失望してしまう。ほうほうの体で空襲の「火の海」から逃れてきて、雑木林のなかで「ぐっすりねむってい」る白痴の女は、「矢張りただ一つの肉塊にすぎない」のである。

「芸術の独創を信じ、個性の独自性を諦めることができないので、義理人情の制度の中で安息することができないばかりか、その凡庸さと低俗卑劣な魂を憎まずにいられない」伊沢の、いわば八人間ならば……筈はないVという一種の独断に端を発した一人芝居は、ときに滑稽な場面を

も見せるが、これ以上は一步も退けぬといった切実な実感を十二分に備えているといつてよい。「人間」をめぐる伊沢はたえず白痴の女と対決せねばならぬ使命を無条件に持たされているかのである。白痴の女に立ち向かうことによって伊沢は自らの内面を凝視し、軽薄なる知識人としての側面を削ぎ落とし、ついには白痴の女と対峙し超克せんとする存在にまで高められてゆくのである。

## 五

「白痴」の世界は、次のように閉じられている。

夜が白んできたら、女を起して焼跡の方には見向きもせず、ともかくねぐらを探して、なるべく遠い停車場をめざして歩きだすことにしよう。伊沢は考えていた。電車や汽車は動くだろうか。停車場の周囲の枕木の垣根にもたれて休んでいるとき、今朝は果して空が晴れて、俺と俺の隣に並んだ豚の背中に太陽の光がそそぐだろうか。伊沢は考えていた。あまり今朝が寒すぎるからであった。

この最後のくだりを石川淳は「しろうとだましの結末らしきところ<sup>註9</sup>」とよんでいるが、たしかに「しろうとだまし」的なこれみよがしの寓意がここにはあるし、また一篇の小説の結末としては、ただ伊沢が「ともかく」「歩きだすこ

とにしよう」と決心するだけにすぎないという、いささかもの足りないような、いうなれば「結末らしき」内容としては不十分なところがある。もっとも、石川淳も認めているとおり、「白痴」にはそういった些細な欠陥を帳消しにし、むしろ魅力としてしまうような安吾の巨大なエネルギーが感じられるのであって、いちがいに責めるわけにもいかないだろう。

それはそれとして、このくだりをよく読んでみると、「しろうとだまし」的な表現というには難解なところがいくつかあって、それらは「白痴」一篇の結末として見落しがたい内容を意味しているように思われる。

たとえば「女を起して焼跡の方には見向きもせず」という箇所である。「女を起して」はさほど問題ではない。「外套と青空」の太平はキミ子の残した人形を敢て貰わずに帰って「爽かき」と同時に「千丈の嘆息」をおぼえたが、いま伊沢は白痴の女を拒否しない。それは伊沢が自分のなかに白痴の女が存在を自覚したからであり、その存在を無視し拒否することが、ひいては「人間」たる自己を喪失してしまう結果につながることを知らされたからにはかならない。「桜の森の満開の下」(「肉体」昭22・6)のあの山賊が、「女を殺すと、俺を殺してしまうのだろうか」とまで考えていながら、けっきょく女を鬼と見まごうて殺し、自分まで消えてしまったことを思えば、伊沢は何とし

ても白痴の女をおき去りにするわけにはいかないのである。にしても、それではなぜ「焼跡の方には見向きも」しないのか、よくはわからない。「焼跡」を荒廃した原初の状態、いわゆる「荒地」だとすれば、「墮落論」からしてもし「見向」いて自覚・確認しておく必要があることになるので、おそらくは、白痴の女を「人間」と錯覚してしまった場——陥穽の空間ととらえておくのが妥当なところではなからうか。

あるいはまた、「なるべく遠い停車場をめざして」という箇所があって、これにしても伊沢はなぜ「なるべく遠い」ところまで「停車場をめざして」出発しなければならぬのか、という疑問を生まなくてはなからう。安吾がどこまで意識的に書いたのか、おそらく何か「新生」のイメージを描きたかったにすぎないのだろうが、ならば「停車場」とは、ひとつの帰着点であるとともに出発点でもあるものの象徴と見なすことができるのではなからうか。

戦争に負けたから墮ちるのではないのだ。人間だから墮ちるのであり、生きているから墮ちるだけだ。だが人間は永遠に墮ちぬくことはできないだろう。なぜなら人間の心は苦難に対して鋼鉄の如くではあり得ない。人間は可憐であり脆弱であり、それ故愚かなものであるが、墮ちぬくためには弱すぎる。人間は結局処女を刺殺せずにはいられず、武士道をあみださずには

いられず、天皇を担ぎださずにはいられなくなるであろう。だが他人の処女でなしに自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだすためには、人は正しく墮ちる道を墮ちきることが必要なのだ。

この「墮落論」の一節にそくして言えば、「人間」が「正しく墮ちる道を墮ちき」ろうとしながら、「自分自身の処女を刺殺し、自分自身の武士道、自分自身の天皇をあみだ」さざるをえなくなるという、その折り返し点こそが「停車場」にはかならない。したがって、その「停車場」は、「なるべく遠い」ほうが望ましい、ということになるのである。

さて、このような伊沢の姿からして、「白痴」を「墮落論」の小説化と見なす意見が登場してきたものと思われる。いかにもそのとおりには違いないが、しかしそれならば、「白痴」をたとえば、「文学のふるさと」の小説化ともよべはしないか。あるいは、安吾のあらゆる小説を「墮落論」の小説化といってもよいのではないか。「白痴」一篇のみ「墮落論」とことさらに結びつけられる理由がいまひとつはつきりしないことは、はじめにふれておいたごとくである。

いったい「白痴」を「墮落論」の小説化というときの、その「墮落論」とは何をさしているのか。わたしはさきに

述べたとおり、「墮落論」の「生きよ墮ちよ」という結語をささえているところの、戦時下の日本には「人間」がいなかったことの発見と反省という、いわば底流した認識と感情とこそが「白痴」に大きくかわっていると考える。その認識と感情は「墮落論」においてはじめて語られたものであり、安吾にとっては戦争体験の意想外な収穫であったといえよう。

「文学のふるさと」において人間存在の原点ともいうべき「ふるさと」の概念を確認した安吾は、つづく「日本文化私観」で「実質」ということの大切さを説いて「生き方を確立したのであり、戦後の「墮落論」で「生きよ墮ちよ」と説いた。その終始一貫した軌跡のうえに「白痴」を措える視点を基本的にくずすことは許されないにしても、戦後の安吾文学が「白痴」からひとつの静かな出発をとげていることもまた、けっして見過ごしてはならないのではないだろうか。

註1 「戦後文学の思想」（戦後日本思想大系13『戦後文学の思想』筑摩書房、昭43・2）

註2 「坂口安吾『白痴』」（『戦後文学作品鑑賞』読売新聞社、昭45・11、初出は「教育国語」16、昭43・3）

註3 「坂口安吾論」（冬樹社、昭47・12）

註4 『物語戦後文学史（全）』（新潮社、昭40・3）

註5 初出誌不明。本文末尾に「（昭和二十二年六月）」とある。なお引用文は『平野謙全集』第十三卷（新潮社、昭49

・12）所載のものに拠った。  
註6 昭21・7・24尾崎士郎宛書簡に、「僕を書くのは肉体と精神との結婚、その宿命を負う人間の懊悩以外にありません」と書かれている。

註7 「太平は『可愛い女』を見た」とか、「風の中に可愛い女が棲んでいた」とある。

註8 「墮落論」（銀座出版社、昭21・6）「後記」  
註9 「安吾のゐる風景」（『文学界』昭30・6）

〔附記〕 引用文等は、旧漢字のものはすべて新漢字に改めた。なお、安吾文は、冬樹社版『定本坂口安吾全集』に拠った。